

令和7年度まほろん企画展

はじめまして

新収蔵資料展

まほろんの

ニューフェイスたち

収蔵庫で出番を待つ遺物たち

収蔵庫からやってきました！

まほろんのバックヤードには、一般収蔵庫と特別収蔵庫という収蔵庫があります。これらの収蔵庫には多くの遺物が保管されています。遺物の正確な点数は数えることができませんが、長さ60cm×幅45cm×深さ14cmを基本サイズとする箱に入れられて整理されています。その箱数に換算すると、60,000箱を超える数の遺物が収蔵されています。そして、その数は毎年少しずつ増え続けています。

一般的な博物館では、購入したり、寄贈や寄託を受けて収蔵資料数が増えていくことが多いです。しかし、まほろんでは、そのどの方法でも収蔵資料の数は増えません。それは、まほろんが、福島県教育委員会が福島県内各地で行った遺跡の発掘調査で出土した遺物などを保管しておくための施設だからです。発掘調査の後、整理が終わり報告書が刊行された遺跡の出土遺物・図・写真が順次まほろんにやってきて、資料数が増えていきます。

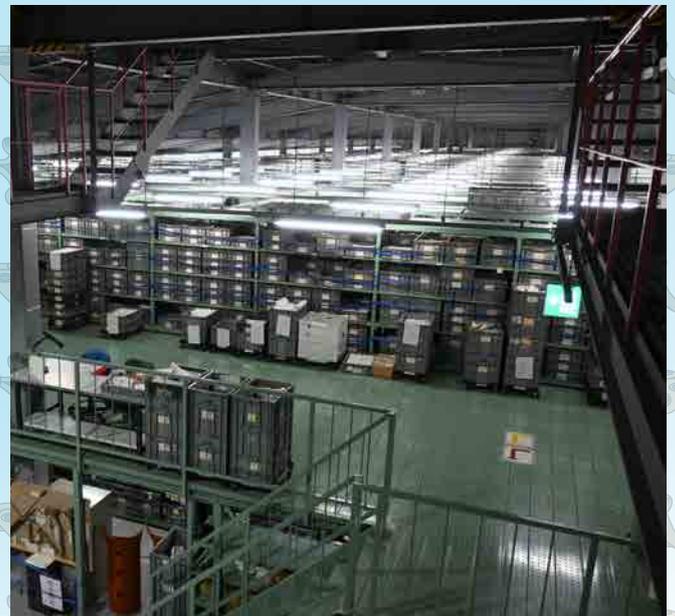
まほろんの収蔵庫に保管されている遺物は、旧石器時代から近世まで、幅広い時代の様々なものがあります。そのどれもがすぐに展示される出番が回って来るわけではありません。小さな破片のため展示に向かなかったり、テーマが合わず機会が回ってこなかったりと、その理由は様々です。

今回の企画展で展示するのは、主に令和に入ってからまほろんに収蔵された遺物です。今年やってきたばかりのものもあれば、数年待つようやく展示される出番がやってきたものもあります。そのほとんどが、まほろんにやって来てから初めて皆さんにはじめてお目見えする『ニューフェイス』たちです。

今後まほろんの「顔」になるかもしれない、期待の遺物たちをご覧ください！



常設展示室からのぞく収蔵庫



一般収蔵庫で出番を待つ遺物たち



南会津の遺跡を掘る



すごい遺跡が見つかった！



南会津地域では、会津縦貫南道路の建設に伴って遺跡の発掘調査が相次いで行われ、縄文時代や弥生時代の遺跡の姿が明らかになってきました。

◆ 栗林遺跡 (下郷町) —江戸時代から知られた遺跡—

栗林遺跡は、阿賀川南岸の段丘上に立地する遺跡です。江戸時代後期にまとめられた『新編会津風土記』に、この遺跡を指すと思われる記述があり、古くから土器が見つかる場所として知られていました。

福島県教育委員会による調査以前にも、下郷町教育委員会による調査が行われています。福島県教育委員会により 2015 年、2018 年～2021年に行われた 5 度にわたる調査では、縄文時代中期から後期にかけての大集落の一部が見つかりました。発見された遺構は、竪穴住居跡 105 軒、土坑 560 基、土器埋設遺構 93 基、配石遺構 31 基、焼土遺構 5 基と多く、南会津地域で発見された縄文時代集落では最大規模のものです。調査されたのは集落の一部分であり、未調査部分も含めるとより大規模な集落があったと考えられます。

栗林遺跡は、東北地方の中でも関東地方、北陸地方と接点を持つ地域に立地していることから、複数地域の特徴を持つ土器が出土していることも大きな特徴です。集落形成初期の中期前葉では、大木 7b 式と関東地方の阿玉台式あたまだいが出土しています。中期中葉の大木 8a 式段階からは、さらに北陸地方からの影響を受けた火炎系土器も見られはじめます。中期後葉の大木 9 式期には、関東地方の加曾利 E 式かそりがみられますが、大木 10 式期の中～新段階になると、関東地方の加曾利 E 式や称名寺式しょうみやうじが主体を占めるようになります。後期初頭～前葉では、東北地方の綱取式つなとりや、関東地方の称名寺式、北陸地方の三十稲場式さんじゅういなばが出土しています。これ以降の時期の土器の出土量は急激に減少することから、後期前葉頃を境に集落が途絶えると考えられます。

竪穴住居跡では、複式炉を持つものが多く確認されています。その形態的特徴は時期によって変化がみられ、新しくなるほど簡素化していく傾向にあります。もっとも古い大木 9 式段階では、会津地方や中通り、栃木県那須地域でみられるものと共通する特徴が確認できます。大木 9～10 式にかけての段階では、石組部が箱形になり、前庭部が退化します。この特徴の複式炉是那須地域の遺跡で確認されています。大木 10 式段階にはさらに簡素化が進み、最終的には土器埋設部と石組部を囲う石は各辺一石になり、底部に石が敷かれないものが多くなります。最終段階の複式炉に伴う土器は、関東地方の加曾利 E 式の土器が多いです。また、複式炉の前庭部に埋甕が設置されるものも多く確認されていますが、住居内に埋甕が伴う例は、関東甲信地方でよく見られることから、那須地域よりも南の地域からの影響が想定されます。



北陸地方の影響を受けた土器(火炎系土器)



関東地方の土器 (阿玉台Ⅳ式)



内外面に赤彩のある土器



複式炉のある竪穴住居跡



複式炉の前庭部に埋甕がある竪穴住居跡



複式炉前庭部の埋甕



東北地方南部と北陸地方の特徴を持った土器のセット

中央：綱取Ⅰ式 左右：三十稻場式



182号土坑からの土器の出土状況

182号土坑からは、東北地方の縄文時代後期前葉の土器である綱取Ⅰ式と、新潟県の同時期の土器である三十稻場式の特徴を持つ土器が相伴して出土しました。この土坑は、堆積土が人為的に埋め戻されていること、土坑の形状、土器の出土状況から墓と推定されます。そのため、土器は一括で埋納されたものと考えられます。

栗林遺跡では、東北地方の土器に限らず、関東地方や北陸地方の特徴を持つ土器が出土していますが、それは器種や容量によって選択する土器の型式を選択していたためと考えられます。他地域との交流で流入してきた文物や生活様式をとりこむ中で、複数地域の土器を補完的なセットとして用いるようになっていったようです。



新顔がたくさん！



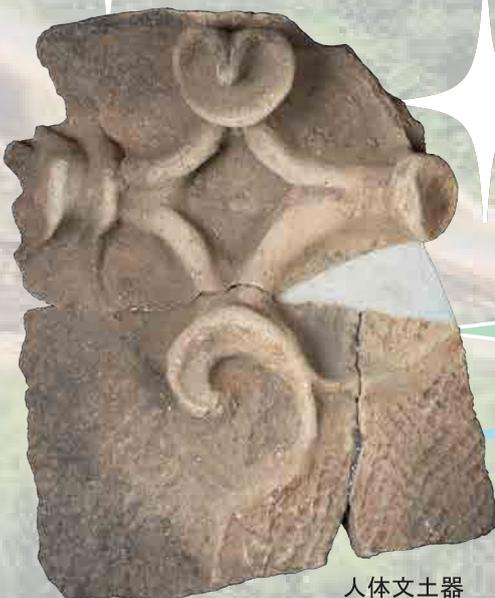
顔面突起



顔面突起



顔面突起



人体文土器



顔面把手



土偶頭部

栗林遺跡出土の縄文土器の中には、顔の意匠が施された突起や把手が多く含まれています。

土器の口縁部付近の外面に、ハート形の顔と菱形の胴体を貼り付けた、「人体文土器」と呼ばれる土器も見つっています。土偶も見つっていますが、突起や把手に表現されたものとは少し印象が違う顔つきです。

顔が表現された縄文土器の出土量は、まほろん収蔵遺跡の中で随一です。

たきのいり 瀧ノ入遺跡(下郷町) しもごうまち 一狭い谷の中にある弥生時代の遺跡一

瀧ノ入遺跡は、阿賀川の支流である隈川沿いの段丘上で見つかりました。遺跡は狭い谷の中の、わずかな平地にあります。平安時代の竪穴住居跡1軒のほか、土坑33基、井戸跡1基、集石遺構2基、焼土遺構2箇所、小穴371基、遺物包含層1ヶ所を調査しました。遺物は、縄文時代と弥生時代のものが多く出土しましたが、その時期の明確な遺構は確認できていません。

弥生土器の一部には、表面に小さな窪みがあるものがあります。その窪みにシリコンを注入して、窪みの中に残った痕跡を形取りして、それを電子顕微鏡で観察したところ、イネとキビの痕跡がそれぞれ1点ずつ見つかりました。瀧ノ入遺跡で調査をする以前は、東北地方では弥生時代後期以降の土器からしかキビの痕跡は見つかっていませんでしたが、より古い時期の中期後葉のものが初めて見つかりました。



種子の痕跡が残っているよ



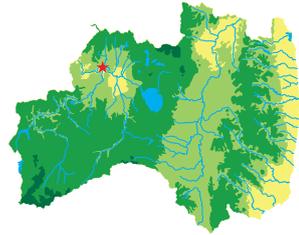
イネの圧痕がある弥生土器



キビの圧痕がある弥生土器

阿賀川下流の古代窯跡

福島県から新潟県へと流れる阿賀川が越後山脈へと出る会津盆地の西縁には、奈良～平安時代の須恵器窯が点在しています。近年、それらの窯跡の発掘調査が重ねられています。



おだこはら 小田高原遺跡(喜多方市) きたかたし 一阿賀川に面した須恵器窯跡一

小田高原遺跡では、縄文時代、奈良時代、平安時代の遺構・遺物が見つっています。

遺跡はもともと、8世紀中頃の須恵器窯である「小田高原窯跡」として知られていました。発掘調査では、その窯跡の推定地点では遺構は見つかりませんでしたが、別地点から3基の須恵器窯跡が発見され、9世紀中頃の須恵器が出土しました。

遺跡の北東約600mの地点では、喜多方市の調査によって西新田窯跡群が見つっています。また、川の対岸、南西に900mの位置には、会津坂下町の調査によって萩ノ窪窯跡が見つっています。この他にも、会津坂下町袋原窯跡があり、会津盆地西縁の阿賀川狭窄部周辺に古代の窯跡が集中しています。会津地方では、会津若松市大戸窯跡群が平安時代の須恵器の大生産地であり、8世紀後半～10世紀にかけて、200基以上あると推定される窯跡で生産が行われました。狭窄部周辺の窯は、それに比べ小規模な生産であったようです。

また、小田高原遺跡からは8世紀末頃～10世紀初頭頃の竪穴住居跡も見つっています。段丘上の平坦部には、8世紀末～9世紀初頭頃の集落があり、その集落域からは円筒形土製品という同時期の新潟県で例の多い遺物が出土しました。このことから阿賀川(阿賀野川)を通じた北陸地方とのつながりがうかがえます。この他に、土器の脚部と思われる獣脚や、粘土でつくられた塔の模造品である瓦塔の一部など、福島県内では出土例の少ない遺物も見つっています。



下流側から見た小田高原遺跡



窯跡からの須恵器の出土状況



3号窯跡出土須恵器



円筒形土製品



獣脚



瓦塔

山間の小さな縄文ムラ

須賀川市では、福島空港近くの山間部にある遺跡から、縄文時代の小さなムラが発見されました。この遺跡では、小さなムラが出来ては消えてを繰り返していたようです。



◆ なめいし 滑石遺跡 (須賀川市)

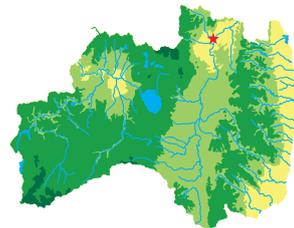
滑石遺跡では、阿武隈川の遊水地整備に伴い発掘調査が行われました。発掘調査では、縄文時代後期後葉～晩期前葉を中心とする竪穴住居跡、掘立柱建物跡が見つっています。また、遺物包含層からは、縄文時代早期～晩期にかけての遺物も出土したほか、弥生時代の遺物もわずかに出土しています。その後は間が空きますが、平安時代には再び竪穴住居跡が確認できるようになります。集落跡が確認できない時期もありますが、縄文時代早期以降、断続的に人が活動していた遺跡であることがわかりました。遺跡の近くには川が流れていて、その水を利用したり、水場に近づいてくる動物を狙ったり、生活しやすい場所にムラをつくったのかもしれない。

遺物では、縄文時代早期の鶺鴒島台式と呼ばれる土器があります。この他に注目なものとしては、赤彩された耳飾り、耳状に飛び出した突起が特徴的な土製品があります。



原始・古代の信達平野

相馬福島道路の建設では、信達平野（福島盆地）内で発掘調査が相次ぎました。その中で、縄文時代～平安時代までの遺構・遺物が見つっています。



桑折町川原田遺跡では、縄文時代晩期～弥生時代初頭、弥生時代中期の土器が出土しています。調査ではその時期の遺構は見つかりませんでしたが、付近にあることが推定されます。

また、平安時代の廂が伴う可能性がある掘立柱建物跡が見つかったとともに、一般集落での出土が少ない、緑釉陶器や灰釉陶器も出土しました。廂付の掘立柱建物跡は格が高いものであり、緑釉・灰釉陶器の出土も考慮すると、有力者が居住していた可能性が考えられます。

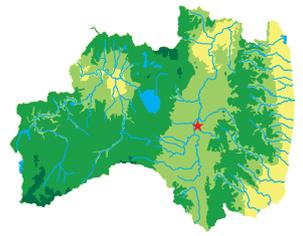
伊達市中室内遺跡では、古墳時代前期の集落跡が見つかりました。信達平野北部では、古墳時代前期の集落跡の調査事例はほとんどなかったため、貴重な発見になりました。

桑折町日照田遺跡では、河川跡などから多くの平安時代の遺物が出土しています。出土遺物の中には、新潟県や山形県域で出土例の多い土師器の鍋があります。両地域に近い会津地域では比較的多く出土しますが、中通りでは他に福島市岩崎町遺跡（福島市調査）で確認できますが、事例の少ない遺物です。



阿武隈川河畔の遺跡

阿武隈川の川べりには、古墳時代以降大きな集落が形成されたことが、発掘調査で明らかになりつつあります。郡山市徳定A・B遺跡では古墳時代と中世の集落が見つかりました。



◆徳定A・B遺跡（郡山市）—阿武隈川沿いにある大遺跡—

徳定A・B遺跡の最初の発掘調査は、東北新幹線建設に伴って行われました。平成に入ってから、郡山市によって道路整備に伴う発掘調査が行われています。更に令和元年の台風で阿武隈川流域で大規模な洪水被害が発生したことから、堤防整備に伴う発掘調査が福島県教育委員会によって実施されることになりました。その調査では、古墳時代後期と中世の遺構が見つかりました。

古墳時代後期の6世紀後半～7世紀前半の時期では、竪穴住居跡と土器が集中する祭祀跡と考えられる遺構が見つかりました。この時期の竪穴住居跡は、新幹線建設や道路整備に伴う発掘調査でも見つかっていて、それと同一の集落と考えられます。その当時の調査では、奈良～平安時代にまで集落が継続することが明らかになっています。

中世では、掘立柱建物跡、方形竪穴建物跡、井戸跡、土坑、溝跡、1,500基近くの柱穴跡が見つかり、中世の集落であると考えられます。その時期の遺物では、常滑・古瀬戸・渥美などの在地産ではない陶器、白磁・青磁といった輸入陶磁器が出土しました。それらは13世紀前半～15世紀前半頃のもので、集落もその時期のものと考えられます。

この時代の出土品で特に注目されるのが、鉄製の獣脚付手取釜です。この釜の底面には、一文字湯口と呼ばれる、鑄型に金属を流し込む際の入口である湯口が一本線を描いているという痕跡が見られます。この一文字湯口は、平安時代中頃に製作が始まったと伝わり、栃木県佐野市で現在も製作されている天明釜の製品に見られる特徴のため、天明釜かその系譜を引く工人によって製作されたものと考えられます。製作年代は特定できませんが、集落と同時期のもので推定されます。獣脚付手取釜は、遺跡からの出土例が今のところ他になく、九州国立博物館に収蔵されている16世紀後半頃の伝世品以外に類例がない、非常に貴重な資料です。

対岸にある荒井猫田遺跡（郡山市が調査）では、町跡や居館跡に加え、奥大道の一部も見つかったことから、街道沿いの町の様子が明らかになりました。出土する陶磁器は在地産よりも、常滑など、遠隔地産のもの出土が多い上に、輸入陶磁器も出土していることから、荒井猫田遺跡に住んだ人たちは、高い生活水準にあったと考えられます。一方、手取釜は茶の湯に使われるものであり、茶の湯を嗜んだ人が徳定A・B遺跡に住んでいた可能性があり、輸入磁器の出土と合わせると、徳定A・B遺跡も荒井猫田遺跡と同じように高い生活水準にあったのかもしれない。

郡山市域は、中世においては阿武隈川を挟んで伊東氏が治める安積郡（熱海町付近を除く、阿武隈川よりも西の郡山市域）、田村氏が治める田村荘（阿武隈川よりも東の郡山市域、三春町、田村市、小野町）と異なる地域に分かれていました。遺跡の周辺は田村荘の中でも川に面した開けた土地がある地域であり、阿武隈川を利用した水運という面でも重要な土地であったのかもしれない。徳定A・B遺跡付近では今のところ、荒井猫田遺跡に匹敵する町跡は見つかっていませんが、今後の調査研究の進展が期待されます。



徳定A・B遺跡遠景



古墳時代の祭祀遺構



獣脚付手取釜

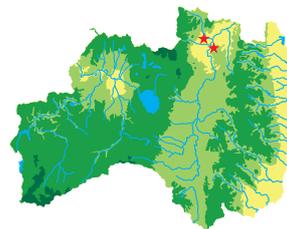


中国産 青磁



伊達郡の中世遺跡

相馬福島道路の建設に伴って信達平野北部では、中世遺跡の調査が多く行われました。その中から注目の遺物が見つかった遺跡を紹介します。



◆新宿遺跡（桑折町） —発見！中世の道跡—

新宿遺跡では中世の道の遺構が見つかりました。遺跡の東にある県道 353号は、近世の奥州街道とほぼ一致しています。奥州街道は、古代の東山道や、中世の奥大道をのルートを踏襲した道です。それと並行していることから、新宿遺跡で見つかった道跡は、鎌倉と奥州をつないだ奥大道の可能性がります。

これ以前の調査で奥大道の遺構が報告されているのは、郡山市荒井猫田遺跡のみです。



遺跡遠景 厚樫山方面を望む



在地産の中世陶器

◆中室内遺跡（伊達市） —地籍図と重なる堀の跡—



遺跡遠景 半田山方面を望む

中室内遺跡では、中世の堀跡を発見しています。この堀跡は、明治期の地籍図にも、方形に巡る堀として記載されていました。現在でも、未調査箇所の一部ではわずかに地表面がへこんでいる箇所があり、近隣住民からの聞き込みでは、昭和30年代頃まで溝として使われていたようです。堀跡の内側には掘立柱建物跡があり、堀跡は館を区画するものと考えられます。

堀跡の堆積土からは、五輪塔の一番下の部分である地輪が見つかりました。この地輪は、上面に意図的にくぼみをつくっています。この他に中世陶器や瓦質土があります。その年代観から、中室内遺跡は14～15世紀頃の館跡と考えられます。遺跡から南西に約800mには伊達氏初代朝宗の居城と伝わる高子館跡があり、本遺跡と伊達氏との関連も想定されます。



五輪塔 地輪



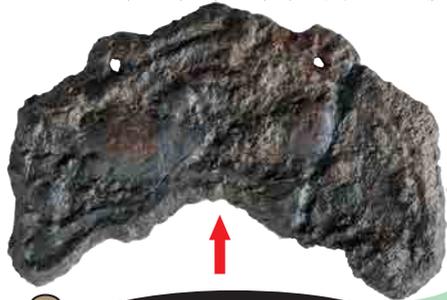
くぼみの中には何か入っていたのかな？

◆荒屋敷遺跡（伊達市） —阿武隈川沿いの重要地点か—

荒屋敷遺跡では方形竪穴建物、土坑、数多くの柱穴など、多くの中世の遺構が確認されています。方形竪穴建物の中には、柱穴の底に根石が置かれた倉庫と考えられるものもあり、遺跡が阿武隈川の自然堤防上にあることから、津（川湊）に伴う遺構群と考えられます。

遺物は、13世紀前半を中心に、14世紀初頭頃までのものが見つかりました。陶器は、在地産のものが大半で、同時期に広く流通していた常滑窯産のものではなく、古瀬戸などの東海系のもの、白磁・青磁といった中国産のものがわずかにあります。在地産の陶器が多く、他地域のものが少ないため、周辺の窯で焼かれた陶器を集積し、阿武隈川を利用して他所へ運搬していたのかもしれませんが。

また、鉄磬や鉄製香炉など、仏教系の遺物も出土していますが、仏教施設と判断できる遺構は見つかりませんでした。なお、遺跡近隣では正応二（1289）年の年号が刻まれた板碑が見つかっており、周辺に何らかの仏教施設が存在していた可能性も考えられます。



錆の下には菊の花の模様！

鉄磬



在地産の中世陶器



倉庫と思われる方形竪穴建物

◆ やながわじょうあと だてし 梁川城跡 (伊達市) —中世伊達氏の居城—

梁川城跡は、伊達市梁川の中心市街地の北東に位置しています。鎌倉時代に築城されたと伝わる城跡です。その築城は、伊達氏が伊達郡に入った頃と考えられます。文献上の記載では、応永 20 (1413) 年に、11代持宗が梁川城に本拠を移したとされています。天文元 (1532) 年に14代植宗が桑折西山城に本居を移しますが、梁川城はその子宗晴に与えられています。天正 18 (1590) 年の豊臣秀吉による奥州仕置以後は、17代伊達政宗の旧所領は、蒲生氏、さらにその後は上杉氏の所領となります。蒲生氏、上杉氏の時期に梁川城は大規模な改修が行われ、土塁や堀などが築かれ、近世の城館として整備されていきます。

伊達市による発掘調査は1970年代後半に開始され (開始当時は梁川町)、現在では30次を超える調査が重ねられています。調査開始の初期には、福島県教育委員会による調査も行われています。

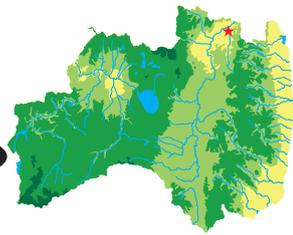
福島県による調査は、旧梁川高校の敷地内にある二ノ丸土塁の箇所で行われました。この調査では、土塁下から集石遺構や木組遺構が見つかっています。土塁中やその下層からは、中～近世の遺物が出土しています。その中には塼も含まれています。塼は古代以降、寺院などでタイルとして利用されていたものです。梁川城跡の他地点の調査では、塼は出土していませんが、南東にある伝東昌寺跡 (茶臼山西遺跡) では、塼が採集されています。このことから、蒲生・上杉の時期に、土塁の構築のために周辺から土を集めていた可能性が考えられます。

他地点の調査では、在地産の陶器に加え、常滑、古瀬戸、渥美、珠洲、信楽などの遠隔地産の陶器、青磁・白磁などの中国産陶磁器などの威信財も多く出土しています。遺構を見ると、本丸内では、東北地方の中世城館としては唯一庭園跡が確認されています。遺構と遺物から伊達氏の勢力の強さをうかがうことができます。

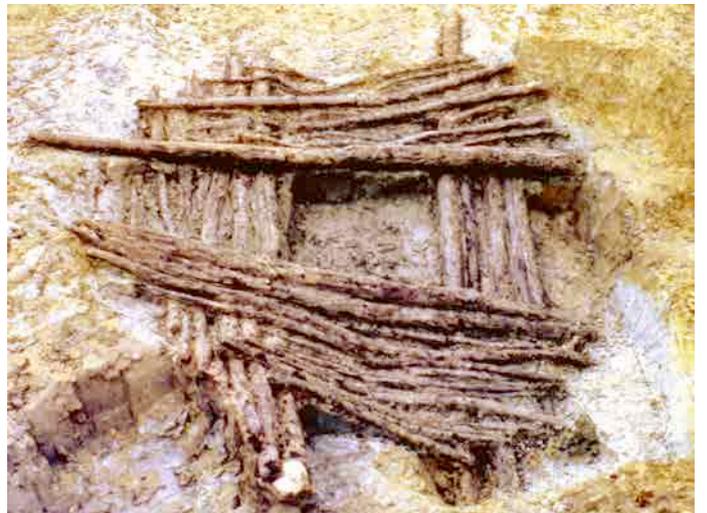
伊達氏の時期には梁川城跡を中心に都市が広がっていて、周辺に關連寺院や居住域がつくられ、都市の北端には伊達氏が氏神とした梁川八幡神社が配置されています。周辺部の遺跡の調査研究も進んでいて、伊達氏の時代の都市景観が明らかになってきています。



關連遺跡の資料を紹介！



調査前の二ノ丸土塁



土塁下から見つかった木組遺構



珠洲 甕



珠洲 擂鉢



中国産 白磁



渥美 壺



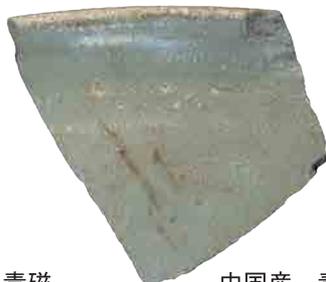
塼



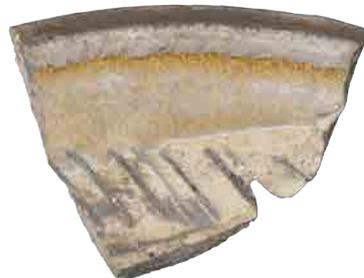
信楽 葉茶壺



中国産 青磁



中国産 青磁

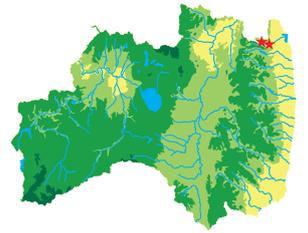


古瀬戸 卸皿



常滑 甕

宇多川流域の縄文・弥生遺跡



阿武隈山地から太平洋に向かって流れる宇多川沿いでは、縄文・弥生時代の遺跡が見つかっています。

◆東羽黒平遺跡（相馬市）—大きな？ハート形土偶が見つかった—

東羽黒平遺跡は相馬福島道路建設に伴って発掘調査が行われました。調査では、縄文・平安時代の遺構が見つかっています。縄文時代では、縄文時代後期前葉の遺物包含層が確認されただけですが、その中からは土偶片や異形土器などが見つかりました。

その中でも特に注目されるのが、ハート形土偶の頭部です。これぞハート形という頭の形をしています。その大きさも福島県内のハート形土偶の中では大型のもので、全身が残っていれば、かなり大きな土偶であったかもしれません。



ハート形の顔、あこがれるうら

ハート形土偶 頭部

◆荻平遺跡（相馬市）—石にも負けず—

荻平遺跡は、阿武隈東道路（相馬福島道路の一区間）の建設に伴って発掘調査が実施されました。

調査地点は大きく3つに分かれ、地点ごとに確認されている遺構の時期が異なります。最も北東にある調査区では、縄文時代前期前葉～中葉、中期初頭、平安時代の集落が確認されました。3つの地点の中で、中央にあたる調査区では、縄文時代早期末～前期初頭、前期後葉の集落が確認されています。最も南西にある調査区では、縄文時代前期初頭、晩期後葉～弥生時代前期初頭、弥生時代中期前葉、平安時代の集落跡が確認されています。このことから、縄文時代には、早期末頃～前期後葉にかけて、地点を変えながら集落が続いていたことがわかります。また、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期や弥生時代中期の集落跡の規模は大きくありませんが、この時期の竪穴住居跡の事例は福島県内ではほとんどなく、集落立地や竪穴住居跡の特徴などを把握できたことも大きな成果です。

この遺跡では、基盤土に人頭大の花崗岩が多く含まれていて、地点によっては、人を越える大きさのものが密集していました。比較的石が少ない地点にも竪穴住居跡が確認されていますが、大きな岩が密集する場所で、岩を取り除いて床面をつくっていると考えられる竪穴住居跡も確認されていて、山間部の限られた土地を有効利用していたようです。

出土遺物では、縄文時代早期末～前期前葉の土器が多く出土しています。前期初頭の砲弾形の土器、大木4～5式期の土器など、完形に近いものもあります。この他に注目される遺物としては、ヒスイ小珠があります。ヒスイは新潟県の糸魚川周辺に原産地があることが知られ、縄文時代には中期以降を中心に、日本各地に流通しています。縄文時代のヒスイ製品は、会津・中通りでは出土例が多い一方で、浜通りでは数例しか知られていない貴重な資料です。



遺跡全景（第2次調査）写真奥が伊達方面



岩と岩との合間に残された縄文時代の竪穴住居跡



小さいけれどキレイな石



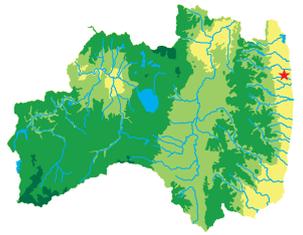
ヒスイ 小珠



縄文土器

左：縄文時代前期後葉 右：縄文時代前期初頭

縄文時代後・晩期の大集落？



南相馬市天神谷地遺跡の発掘調査では多量の土器が出土しました。その中にはイレズミの表現がある土偶など貴重なものも含まれています。もしかしたら、縄文時代の大集落があったのかもしれない。

◆^{てんじんやち}天神谷地遺跡（^{みなみそうまし}南相馬市）—^{げいめん}新たに見つかった黥面土偶の故郷—

天神谷地遺跡の存在は古くから知られていたようで、東京帝国大学が1928年に発行した『日本石器時代遺物発見地名表』に記載があり、1950年刊行の『福島県の古代文化』には縄文時代の遺跡として挙げられています。また、浜通りで多くの遺物を採集した竹島国基のコレクションの中にも、この遺跡で採集したものが含まれており、1952年と1954年に採集したという記録が残っています。

発掘調査は、遺跡範囲全体のごく限られた部分で行われましたが、その狭い範囲の中から多くの遺物が出土しています。

調査された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑8基、土器埋設遺構7基、柱穴115基と多くありませんが、2か所の遺物包含層から約2,000kgの遺物が出土しました。

出土遺物は、縄文時代後期後葉～晩期の時期のものが多く、縄文時代中期、弥生時代前期のものもわずかに出土しています。

遺物包含層からは、多くの製塩土器が出土しています。浜通りの縄文時代晩期の遺跡からは製塩土器が出土する事例が多く、南相馬市鹿島区^{かきさい}中才遺跡でも多量の製塩土器が出土しています。天神谷地遺跡は現在の海岸線から約4km、中才遺跡は約4.5km内陸にあります。天神谷地遺跡から出土した製塩土器の付着物を分析したところ、海藻などに由来する珪藻化石が確認されたことから、乾燥させた海藻を焼いて藻灰をつくり、海水と混ぜて加熱する手法で塩づくりが行われていた可能性があります。

遺物包含層から出土した遺物の中で特に注目されるのが、黥面土偶の頭部です。顔全体に条線によるイレズミの表現があります。また、耳飾りや、後頭部の髪と^{まげ}堅櫛など、これまで発見された黥面土偶の中でも精緻な表現をされたものです。

調査範囲が限られていたため、遺跡の規模や性格は明らかにできませんでしたが、出土遺物を含め、今後注目の遺跡です。



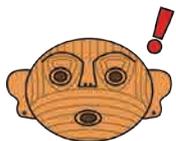
わたしが見つかった場所です



調査区全景（写真奥側が太平洋）



遺物包含層から見つかった大量の土器



すごい！赤い色が残っている！



赤彩が残る壺



異形土器



製塩土器

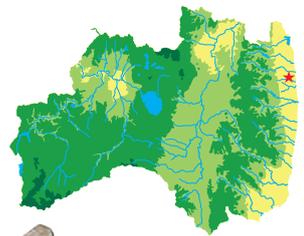


黥面土偶



川と石のまつり

南相馬市塚田B遺跡からは、川の跡から多くの石製模造品が見つかりました。そこでは、水を祀る祭祀が行われたと考えられます。



◆ 塚田B遺跡 (南相馬市)

塚田B遺跡は、農地整備のための水路建設に伴って発掘調査が行われました。そのため、調査範囲は細長く、面的な遺構の広がりを把握できていません。しかし、その限られた範囲の中から、古墳時代前期～後期の堅穴住居跡 12 軒や、遺物が出土する溝跡や流路跡が 9 条確認されました。

塚田B遺跡の溝跡や流路跡からは、土器や石製模造品が集中して出土する地点が何箇所か確認され、意図的にその箇所に置かれたものと推定されました。古墳時代では、石製模造品が土器とともに集中して出土する事例が多く知られ、何らかの祭祀を行った跡と考えられています。塚田B遺跡も同様に祭祀を行った跡と考えられます。出土した石製模造品には、剣形、勾玉形、有孔円板（鏡を模したもの）、白玉があります。

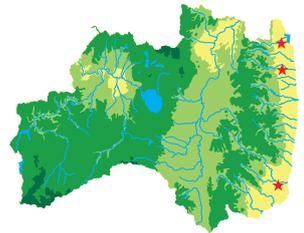
塚田B遺跡では、完成品だけではなく、製作途中に出る石材片や、未完成のものも出土していて、遺跡内で石製模造品の製作が行われていたことも判明しました。

また、土器片を再利用した研磨具が出土しています。土器の表面が溝状に凹んでいて、そこに石をあてて研磨したと考えられます。このような研磨具の例は、県内では郡山市正直A遺跡で1点あるだけですが、茨城県南部の霞ヶ浦周辺地域にも類似があることがわかっています。



古代の遺跡の一品

浜通りでは、震災後、復興や防災対策のための事業地内にある遺跡を保護・保存する調査が続いています。その中で、貴重な資料が見つかりました。



夏井廃寺跡は、古代の磐城郡衙（古代の役所）である根岸遺跡の北にある遺跡で、郡衙に関連する寺院跡です。両遺跡は、いわき市による調査が行われていましたが、震災後には福島県により周辺の分布・試掘調査も行われています。その調査の際に、左右反転した「嶋」の文字がスタンプされた瓦が見つかりました。根岸遺跡や夏井廃寺跡の発掘調査では、「吉」・「嶋」・「福」・「昌」の文字がある瓦が見つかりました。このような文字瓦が見つかることは明治期から知られていて、「福島」あるいは「吉島」のどちらかの組み合わせであると考えられていました。近年では、鎌倉時代以降にいわき市中央から北東の海岸部にまたがる箇所に立荘された「好嶋荘」の前身に当たる地名ではないかという説があります。

南相馬市辻内遺跡では、10世紀前葉頃の集落が見つかりました。2軒の堅穴住居跡からは、杯を中心とした多くの土師器が出土したほか、2号住居跡から灰釉陶器片が出土し、土坑からは風字硯が出土しています。この風字硯は、10世紀前葉頃の土器片と共に出土したため、その頃に廃棄されたものと考えられます。

相馬市大毛内B遺跡では 11 軒の堅穴住居跡が確認され、9世紀後半～10世紀前半にかけての集落跡があることがわかりました。その内の一軒から、輸入品である中国越州窯系の青磁碗の破片が出土した他、銅鉢の破片も出土しています。平安時代の輸入磁器は、福島県内では他に会津坂下町大江古屋敷遺跡と吉原遺跡で出土しているだけであり、非常に珍しいものです。

灰釉陶器、輸入磁器、風字硯などは、平安時代の一般集落から出土する事例は少なく、辻内遺跡と大毛内B遺跡がどのような性格の集落であったのか、今後の解明が期待されます。



文字瓦「嶋」
(夏井廃寺跡)

中国産 青磁
(大毛内B遺跡)

風字硯 (辻内遺跡)

この町の遺跡もあります！

これまで紹介した以外にも遺跡の発掘調査がおこなわれています。それらの遺跡や遺物を紹介します。

かみよしだ

◆ 上吉田C遺跡 (会津若松市)

あいづわかまつし



会津縦貫北道路の整備に伴って調査が行われました。中世～近世頃の溝跡が見つかっています。

むかいのいりやま

◆ 向ノ入山遺跡 (川俣町)

かわまたまち



国道 349 号の改修に伴って発掘調査が行われました。丘陵の上から平安時代の竪穴住居跡が見つかったほか、縄文時代早期・前期・後期・晩期の土器片が出土しています。

やち

◆ 谷地遺跡 (浪江町)

なみえまち



県道拡幅に伴って発掘調査が行われました。弥生時代中期の土器・石器、奈良時代の集落跡が確認されました。

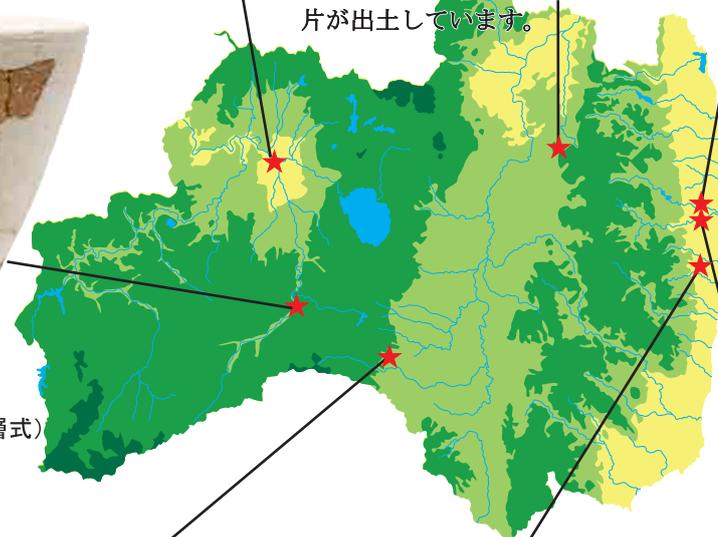
いろいろな地域の遺跡を調査したんだ

ほかにも調査された遺跡があるよ！

次はどこで調査がされるんでしょうか？



縄文土器 (早期：田戸下層式)
しもごうまち なかつましんでん
下郷町中妻新田遺跡



◆ じょうろくよこあなぼぐん 丈六横穴墓群

◆ じょうろくこふんぐん 丈六古墳群 (浪江町)

なみえまち



県道改修に伴って発掘調査が行われました。古墳時代後期・終末期の横穴と、それに伴う後背墳丘と推定される古墳の調査が行われました。横穴墓群の後ろに広がる丘陵上には、浪江町教育委員会によって一部調査が行われた丈六古墳群があります。

ふませくまのもり

◆ 踏瀬熊ノ森遺跡 (泉崎村)

いずみざきむら



国道 4 号の片側 2 車線化工事に伴って発掘調査が行われました。

縄文時代の落とし穴、古墳時代中期後半の竪穴住居跡が見つかっています。

たかつどたてあと

◆ 高津戸館跡 (富岡町)

とみおかまち



県道整備に伴って発掘調査が行われました。城館跡の堀と土塁の一部を調査しましたが、遺物は見つかっていません。戦国時代に構築されたものと推定されます。

新 収蔵資料展



まほろんの ニューフェイスたち

本展の開催及び資料作成にあたり、ご協力いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。(敬称略)

飯村 均 今野 賀章 伊達市教育委員会

発行日

2025 年 10 月 25 日 (土)

開催期間

2025 年 10 月 25 日 (土)

～ 12 月 14 日 (日)

編集・発行

公益財団法人福島県文化振興財団

福島県文化財センター白河館

〒961-0835

福島県白河市白坂一里段 86

電話 0248-21-0700